

第二章 心の諸性質

二章一節 心の諸相

ここまで仏道が説明するところの自己や心というものについて、現代の心理学や認知科学、神経生物学などを考慮して合理的に理解してきた。

第一部では、私たちの意識経験を「意識そのもの（意識の場）」と「意識内容」に区別した。意識の場とは、「知る」というはたらきのある「ところ」であり、クオリア発現の「場」である。この「場」の活動の内に、多彩なクオリア（意識内容）がもたらされる。

場を彩る意識内容は、数十ミリ秒以下の時間スケールの「一次現象特性（スナップショット）」と、数百ミリ秒以上の時間スケールの「二次現象特性（今現在の意識シーン）」に区別される。私たちの意識経験は、まずは意識の場として生じる。その場の波動的活動によって、スナップショットが連続して生成し（一次現象特性）、場の中に顕現する情報群が統合することによって、一つのまとまった意識情景が出来上がる（二次現象特性）。二次現象特性レベルの今現在の意識シーンでは、今この瞬間に生じたスナップショット、そして、過去のスナップショット群のメモリー（感覚記憶）が統合されている。この過去と現在が融合した、今現在の意識シーンの内に、主客二元の構造（世界と私）が出来上がる。通常、スナップショットの一つ一つは分別して認知されることはない。しかしながら、止観の行者はそれを直知する（生滅智、壊滅智など）。また、近年の意識研究もスナップショットによって私たちの意識が成立している可能性を指摘する。

今現在の意識シーンでは、意味処理のプロセスが休むこと無く進行しているが、深いレベルでの意味処理が施されるためには、「注意」と「記憶」という二つの心理機能が重要な役割を果たす。ボトムアップ式に生起するクオリア群によって構成された今現在の意識シーンに対して、トップダウン式の注意が十分に機能することになれば、特定の情報にクローズアップされたスナップショットの発現頻度は増し、また、感覚記憶は延長されて短期記憶となる。これら一連の出来事によって、今現在の情報と、脳内各所に蓄積された意味情報や記憶情報とのリンクが促進し、選択された対象に対して、効率の良い深いレベルでの意味処理が進むことになる。

第二部では、私たちの心を、「粗大レベル」、「微細レベル」、「もっとも微細なレベル」

の三つに区別して分析考察を進めた。心理学的な立場からみれば、もっとも微細なレベルは意識の場そのものに相当し、微細レベルと粗大レベルは意識の場の異なる活動状態を示している。普段、私たちが認知するクオリアの世界は粗大レベルであり、それは意識場の粗大な活動状態である。意識の一次現象特性（スナップショット）、二次現象特性（今現在の意識シーン）、それに続く意味処理のプロセスはすべてこのレベルに属する心の粗い活動である。それに対して、心の微細レベルは意識場の微細な活動状態である。通常それは潜在的なものとなっており、認知されることはない。しかしながら、心の粗大レベルの活動が後退する特殊な意識条件下においては、微細な場の活動が顕現する。

微細な場の活動が顕在化する機会は少なくとも二つある。一つは「死」を迎える際である。修行の有無に関わらず、誰にもその機会は訪れる。死の間際に粗大な意識活動がゆっくりと後退すれば、場の微細な活動は「光」の体験として現れる。チベット密教が伝えるところでは、死のプロセスの進行具合に応じて光の様相は変化する。それは死の間際の意識状態の変化の程度を示す指標（死のしるし）となる。

そして、もう一つの微細な場の活動が顕在化する機会は「仏道」である。それは注意集中の指標（ニミッタ）として現れる。修行の成果として、注意集中が深まるにつれて、ニミッタはより澄んで輝くものとなっていく。熟練した止観の行者はこの澄んで輝く光を分解して、微粒子の単位（ルーパ・カラーパ）として認知するようになる。このような場の微細な活動（光の世界）は、各種の感覚刺激に应答し、場の粗大な活動（多彩なクオリアの世界）へと分化発展している。

第三部では、心のもっとも微細なレベル、正覚の境地について述べた。正覚の瞬間、意識そのものは生じているのだが、意識の場は空となり、それまであった心の様々なたらきは払拭される。主客二元の意識構造は消失し、思考判断の作用もはたらくことはない。その空なる瞬間において、「知る」という心の本性は、最もピュアなかたちで露呈することになる。その時、修行者は心の本性を如実に理解する。仏教はその空の境地を無分別智と呼んでいる。

通常の認知プロセスは、相対的な真理しか把捉しない分別智である。しかしながら、空なる無分別智は絶対的な真理を捉える。西洋の知性は研ぎ澄まされた分別智であるのに対し、東洋の叡智とはこの無分別智のことである。東洋では無分別智こそが根本的で絶対的な智慧であると理解されている。

普段の自己の感覚は、今現在の意識シーンの内に形成されている。そこで展開される、

身体感覚（ボディ・イメージ）、快・不快の感覚、感情や思考、欲求や意志の流れ…
…これらの身体と精神の活動のプロセス（五蘊）が、「私」という実体的な認知（および行為）主体の感覚を、「いま／ここ」において仮構している。

このような実体的な自己の感覚は、その都度の意識内容によって仮構されるものであるが、自己の感覚は本来、意識の「内容」ではなく「場」に由来する。自己感覚は特定の意識の「内容」では無く、「場」に根付いている。この場のレベルでの自己を、最も純粋な状態で知るの無分別智の瞬間である。心の本性、場の本質を如実に知る瞬間、最も深いレベルで自己の本質を学ぶことになる。

伝統的には非仏教は、そのレベルでの自己智を積極的に語って形而上学的な自己論を展開した。しかしながら仏教は、基本的な態度として不毛な形而上学的議論を拒否し、沈黙を守った。

以上をまとめると、表5のようになるだろう。

第一には、「場」のレベルがある。意識のもっとも基礎的な機能は「知る」というはたらきである。心とは「知る」ことである。この「知る」という心の本来のはたらきがある「ところ」が、意識の場である。それはクオリア発現の舞台（場）であり、場の無いところにクオリアは生じない。純粋な場のレベルにおいては、取られる対象は無く、空性である。主客二元の認知構造も無い。仏教の正覚とは、この場のレベルでの心の本性を如実に知ることであり、心の様々なはたらきが払拭されて心の本性があらわとなった瞬間、無分別智は訪れる。

表5. 心の諸性質

	場のレベル	微細な活動レベル	粗大な活動レベル		
			無常相	日常相	
			I	II	III
性質	知る、場	プレクオリア	一次現象特性	二次現象特性	意味処理
			スナップショット	主客二元	判断、区別、概念
内容	空	光	無常の世界	感覚世界	意味の世界
		ルーバ・カラーバ			論理の世界
大乘起信論	心真如	心生滅（三細・六塵）			
ゾクチェン	ダン	ロールバ	ツアル		
チベット密教	最も微細なレベル	微細なレベル	粗大なレベル		

第二には、場の微細な活動レベルがある。それは成熟したクオリアが形成される以前の微細な場の活動である。通常、そのような場の微細な活動は潜在的なものとなっており、認知されることはない。しかしながら、日常的なクオリアの世界がゆっくりと後退すれば、光体験やルーパ・カラーパのようなプレクオリアとしてそれは顕在化する。

そして第三には、場の粗大な活動レベルがある。水面上に広がる波のように、成熟したクオリアは場上にスナップショットとして現れる（一次現象特性）。今この瞬間において生起するスナップショットの情報、そして過ぎ去ったスナップショットのメモリー（記憶）情報は統合して、「今ここの意識シーン」が形成される（二次現象特性）。この統合作用の中で、心の基本構造である主客の二元性は生まれる（それ以前は主客未分の境地である）。

今ここの意識シーンは、随時、意味処理を受けている。人間は高度に発達した意味処理機能によって、高次の精神活動（分別智）が可能となっている。

本書は神経生物学的な立場から、私たちの意識経験の形成に必要とされる神経活動を、NCCf（意識場に相関する神経活動）、NCC1（意識の波動的性質に相関する神経活動）、NCC2（意識の統合的性質に相関する神経活動）と定義し、それが具体的には如何なる神経活動を考察してきた。今後、神経生物学における知見が増えるにしたがって、今以上にその具体的な姿形が明らかになってくるであろう。将来的には、粗大なレベルだけでなく、微細なレベルの意識場の活動に相関する神経生物学的事象も明らかにされるであろう。

心の活動と物質の活動は密接に相関しており、そこに現れる二つの秩序性（つまり、主観的な心的プロセスの秩序性と、客観的な物的プロセスの秩序性）は決して無関係ではあり得ない。一方を理解することは、他方を理解することに通じている。双方を正しく理解することによってこそ真実は明らかとなる。